体育学部生の障害のある人とスポーツに対する認識の変化について

―― 第２報 ――

吉岡尚美*1・内田匡輔*2

Effects of Learning on Understanding People with Disabilities and Adapted Sports

―― The 2nd Report of A Survey on Students of the College of Physical Education ――

by

Naomi YOSHIOKA and Kyosuke UCHIDA

Abstract

The purpose of this paper is to report the results of a survey conducted in 2007 and 2008 to examine the learning effects on understanding people with disabilities and adapted sports among students of the College of Physical Education. The results indicate as follows: 1) Although there were many students who saw adapted sports, most of them did not experience the sports with people with disabilities, 2) After taking the class, many students became thinking more positive action toward people with visual impairment, 3) After taking the class, perception toward people with disabilities and adapted sport became more positive, 4) Changes of perception among female students are more noticeable than male students, 5) After taking the class, students became confident in instructing sports to people with disabilities, 6) Students are not positive about participating in fields of adapted sports.

Ⅰ　はじめに

体育，スポーツ分野に幅広く指導者を送り出す役割を担う体育学部で，障害のある人や「障害者スポーツ」ならびに「アダプテッドスポーツ」について学生が理解を深める機会をつくることは，「障害者スポーツ」振興のための大切な取り組みであると考える。本研究者らは，障害のある人に関する授業の履修が，学生の障害のある人と「障害者スポーツ」に対する認識に及ぼす学習効果を検証することを目的に，2006年度より，東海大学体育学部で開講されている２科目，「障害者スポーツ演習」と「障害者教育論」において質問紙調査を実施した。第１報として，2007年度東海大学紀要体育学部第37号では，2006年度に体育学部生涯スポーツ学科で開講された「障害者スポーツ演

＊１　東海大学体育学部生涯スポーツ学科　　＊２　東海大学体育学部体育学科

習」の履修学生を対象とした結果を報告した[1]。

本稿では，第２報として，2007年度と2008年度に「障害者スポーツ演習」を履修した学生を対象とした調査の結果を報告する。

II　目的

本研究の目的は，障害のある人に関する授業を履修した学生の，障害のある人と「障害者スポーツ」に対する認識と指導への意識の変化を調査し，学習効果を検証するとともに，今後の「障害者スポーツ」指導者養成のために必要な要因を検討することであった。

III　方法

１．調査対象

東海大学体育学部生涯スポーツ学科で2007年度と2008年度に開講された科目「障害者スポーツ演習」を履修した学生159名を対象とした。

２．調査方法

先行研究などを参考に，障害のある人と「障害者スポーツ」について聞く自己記入式の質問紙を独自に作成した。調査は，科目履修前後で実施した。調査内容は，過去における「障害者スポーツ」とのかかわり，視覚障害のある人への対応，障害のある人と「障害者スポーツ」に対する認識，ならびに「障害者スポーツ」の指導についてであった。

３．調査期間

科目履修前の調査は，各年度の第１回目の授業ガイダンス時に行い，科目履修後の調査は，講義最終日に行った。

４．分析方法

本研究では，各年度の前後の調査で一致した学生116名（男子学生56名，女子学生60名）を分析の対象とした。過去における「障害者スポーツ」とのかかわりについては，各項目を単純集計した。視覚障害のある人への対応については，履修前と履修後の回答を男女別にクロス集計を行った。障害のある人と「障害者スポーツ」に対する認識の変化については，履修前と履修後の尺度の平均値を対応のあるＴ検定で分析した。「障害者スポーツ」の指導については，履修前と履修後の回答を男女別にクロス集計を行った。

IV　結果及び考察

１．過去における「障害者スポーツ」とのかかわりについて

過去における「障害者スポーツ」とのかかわりについては，すべての問いに「はい」と「いいえ」で回答を求めた。その結果，過去に「障害者スポーツ」をみたことがあるかという問いに対して，「みたことがある」と回答したものは103名（88.8%），「みたことがない」と回答したものは，13名（11.2%）であった（図１）。

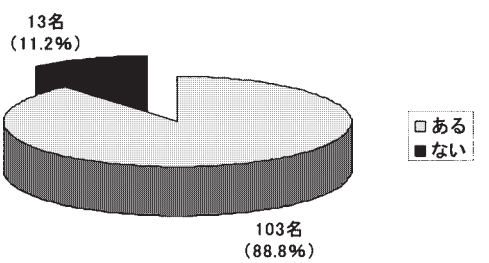

図１　「障害者スポーツ」をみたことがあるか

また，過去に障害のある人と一緒にスポーツを行なったことがあるかという問いに対して，「行なったことがある」と回答したものは32名（27.6%），「行なったことがない」と回答したものは84名（72.4%）であった（図２）。

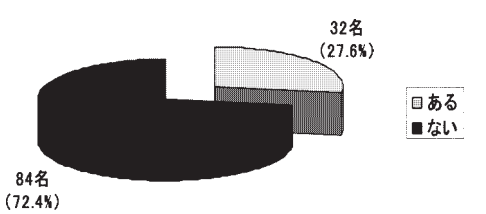

図２　障害のある人と一緒に「障害者スポーツ」を行なったことがあるか

さらに，過去に「障害者スポーツ」のボランティア活動を行なったことがあるかという問いに対して，「行なったことがある」と回答したものは

22名（19%），「行なったことがない」と回答したものは93名（80.1%），無回答者１名（0.9%）であった（図３）。

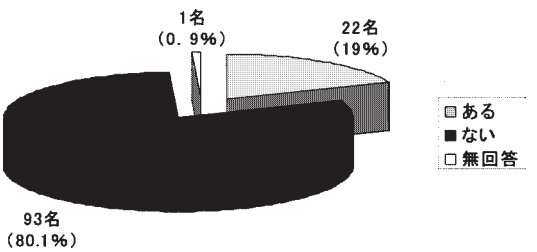

図３　「障害者スポーツ」のボランティア活動を行なったことがあるか

第１報と同様に，障害のある人がスポーツをする姿をみたことがあるという学生が多いという結果は，2008年夏の北京パラリンピックをはじめとするメディアでの取り上げ方が影響しているのではないかと考える。しかしながら，実際に障害のある人とスポーツを通じてかかわった経験がある学生数は少なく，「障害者スポーツ」の環境や現状，指導方法，競技の特徴などについて知ることができる「現場」へ出ていないことがわかった。

２．視覚障害のある人への対応について

白杖を使用する『視覚障害者』をみかけたらどうするかという問いに対して，５つの選択肢から回答を求め，履修前後で比較したところ，表１のような結果となった。

表１　白杖を使用する視覚障害者をみかけたらどうするか

	男子学生(n=56)		女子学生(n=60)	
	履修前	履修後	履修前	履修後
とにかく声をかける	0	0	1	2
状況を観察してから声をかける	17	33	13	36
状況を見守る	30	19	35	19
いるなと思う	8	4	10	2
避ける	1	0	0	1
無回答	0	0	1	0

男女共，履修前には「状況を見守る」または「いるなと思う」という回答が多く，「声をかける」という行動に積極的ではなかったが，履修後の回答では，「状況を観察してから声をかける」という回答が増加した。男子学生では，履修前に「状況を見守る」と回答した30名のうち，15名が履修後には「状況を観察してから声をかける」へ回答が変化した。また，女子学生では，履修前に「状況を見守る」と回答した35名のうち，19名が履修後には「状況を観察してから声をかける」へ回答が変化した。

「障害者スポーツ演習」の授業では，視覚障害について，特徴や補助の仕方を講義し，視覚障害疑似体験としてアイマスクを着用して歩行するだけでなく，「ブラインドサッカー」や「ゴールボール」というスポーツを体験する時間も設けた。一般的に，疑似体験だけでは，「目がみえないことは怖いことだ」や「目がみえないことは大変だ」というネガティブな感想しか残らない傾向がみられる。また，「実際に声をかけたくてもどのように補助をすればよいかわからない」という声もよく聞かれる。正しい補助の方法を理解したり，スポーツを体験することで，「目がみえなくても，補助があれば活動が広がる」という考えや「視覚障害があってもスポーツは楽しめる」という認識を持つ機会が得られたのではないかと考える。

３．障害のある人と「障害者スポーツ」に対する認識について

障害のある人と「障害者スポーツ」に対する認識については，各質問項目に対して，「大変そう思う」，「ややそう思う」，「あまりそう思わない」，「全くそう思わない」の４段階尺度で回答してもらい，平均値の変化を対応のあるＴ検定で分析し，授業履修前後の変化を調べた。表２は履修前と履修後の男女のスコアを比較した結果である。

表２　障害のある人と「障害者スポーツ」に対する認識（男女比較）

	履修前		履修後		
	男子学生(n=56)	女子学生(n=60)	男子学生(n=56)	女子学生(n=60)	
障害者は、特別だ	2.55	2.50	2.32	2.17	
障害者は、かわいそうだ	2.50	2.42	2.00	1.83	
障害者は、できるスポーツが少ない	2.16	2.32	1.95	1.70	
障害者は、工夫をすれば健常者と一緒にスポーツができる	3.48	3.62	3.64	3.88	*
障害者は、頑張っている	3.16	3.18	2.98	3.27	*
障害を持つことは、不幸なことだ	2.30	2.22	2.48	2.15	*
障害者は、スポーツを行うことで身体的効果が得られる	3.53	3.57	3.77	3.85	
将来、障害者スポーツに何らかの形でかかわりたい	2.70	2.80	2.82	2.93	
障害者がスポーツを行うことで、社会の障害者に対する意識に影響する	3.32	3.42	3.48	3.82	*
障害者は、スポーツを行うことで心理的効果が得られる	3.64	3.65	3.73	3.93	*
障害を持つことは、不便だ	2.93	2.80	2.71	2.52	
将来、障害者スポーツにかかわる仕事につきたい	2.25	2.35	2.45	2.48	
障害者は、スポーツを行うことで社会参加の機会が得られる	3.32	3.48	3.59	3.83	*
障害者スポーツは、自分達が行っているスポーツと同様に楽しめるものだ	3.63	3.78	3.86	3.92	

平均　＊ $p<0.05$

履修前では，男女のスコアに有意差は認められなかったが，履修後には，6項目で男女のスコアに有意な差が示された。また，表3は男女別に履修前後の変化を表したものである。男子学生では，12項目中5項目において有意な変化がみられ，女子学生では12項目中10項目で有意な変化が示された。

表3　障害のある人と「障害者スポーツ」に対する認識の変化

	男子学生(n=56)			女子学生(n=60)		
	履修前	履修後		履修前	履修後	
障害者は、特別だ	2.55	2.32	*	2.50	2.17	*
障害者は、かわいそうだ	2.50	2.00	*	2.42	1.83	*
障害者は、できるスポーツが少ない	2.16	1.95		2.32	1.70	*
障害者は、工夫をすれば健常者と一緒にスポーツができる	3.48	3.64		3.62	3.88	*
障害者は、頑張っている	3.16	2.98		3.18	3.27	
障害を持つことは、不幸なことだ	2.30	2.48		2.22	2.15	
障害者は、スポーツを行うことで身体的効果が得られる	3.63	3.77		3.57	3.85	*
将来、障害者スポーツに何らかの形でかかわりたい	2.70	2.82		2.80	2.93	
障害者がスポーツを行うことで、社会の障害者に対する意識に影響する	3.32	3.48		3.42	3.82	*
障害者は、スポーツを行うことで心理的効果が得られる	3.64	3.73		3.65	3.93	*
障害を持つことは、不便だ	2.93	2.71		2.80	2.52	*
将来、障害者スポーツにかかわる仕事につきたい	2.25	2.45	*	2.35	2.48	
障害者は、スポーツを行うことで社会参加の機会が得られる	3.32	3.59	*	3.48	3.83	*
障害者スポーツは、自分達が行っているスポーツと同様に楽しめるものだ	3.63	3.86	*	3.78	3.92	*

平均　＊p <0.05

まず，障害のある人に対する認識については，「障害者は特別だ」，「障害者はかわいそうだ」，「障害者は頑張っている」，「障害を持つことは不幸なことだ」，「障害を持つことは不便だ」という項目で変化を調べた。これらの質問の回答では，平均値が低くなっていることが好ましいと判断した。その結果，「障害者は特別だ」，「障害者はかわいそうだ」という項目については，男女共で有意な変化がみられた。また，「障害を持つことは不便だ」という項目においては，女子学生で有意な変化がみられ，男子学生でも平均値が低くなっていた。

しかし，「障害を持つことは不幸なことだ」という項目では，男子学生のスコアが高くなり，女子学生でも有意な変化が示されなかった。また，「障害者は頑張っている」という項目においても男女ともに有意な変化がみられなかった。特に，女子学生では履修後のスコアの方が高くなっていた。日頃マスメディアで，「障害があるのにこんなに頑張っている」というように障害のある人を取り上げているものをよくみかける。マスメディアはこのような取り上げ方をすることにより，人々に感動を与え，障害のある人に対する理解を求めようとしているのかもしれない。しかし一方で，「障害があるのに頑張っている」という見解は，「障害」というものをネガティブに捉え，「それでも頑張る障害のある人」を特別視しているとも言えるのではないだろうか。徳田ら[2]は，マスメディアを通じた「清く正しく美しい障害者像の氾濫は，障害者の生活を圧迫し窮屈なものにするだけでなく，共生社会の実現を妨げる原因になる」と指摘している。このことから，本調査では，「頑張っている」という言葉をネガティブな認識を表すものとして質問項目に入れたが，一般的に「頑張っている」という言葉はポジティブに捉えられることが多いため，このような結果につながったと考えられる。このような微妙な言葉の意味合いについて調査することの課題が明らかになった。

次に，「障害者スポーツ」に対する認識については，「障害者はできるスポーツが少ない」，「障害者は工夫をすれば健常者と一緒にスポーツができる」，「障害者スポーツは自分達が行っているスポーツと同様に楽しめるものだ」という項目で，「障害者のスポーツ」ではなく，「アダプテッドスポーツ」としての考え方や見方ができるようになったかを検討した。また，「障害者はスポーツを行うことで身体的，心理的効果が得られる」，「障害者がスポーツを行うことで社会の障害者に対する意識に影響する」，「障害者がスポーツを行うことで社会参加の機会が得られる」という項目で，障害のある人がスポーツを行う意義や目的，効果を理解することができたかを検討した。

徳田ら[3]の調査では，体育系の学生は社会福祉系の学生と比べて，障害のある人はバレーボール，サッカー，野球などのスポーツを「行えない」と評価する割合が多く，「道具やルールを工夫するとできる」と考える割合も低いという結果が報告されている。日頃スポーツに親しんでいる体育学部生の方が，障害のある人のスポーツに対して間違った理解をしていることがわかる報告である。本調査の結果では，男子学生では有意な変化が示されなかったものの，女子学生では「障害者はできるスポーツが少ない」，「工夫をすれば健常者と一緒にスポーツができる」という問いに対して有意

な変化が示された。また，「障害者スポーツは自分達が行っているスポーツと同様に楽しめるものだ」という質問に対しては男女共に有意な変化が示され，「大変そう思う」と回答する学生が増えたことがわかった。このことから，徳田らが指摘した体育系の学生が持つ傾向にある間違った理解やイメージを変化させ，「アダプテッドスポーツ」の考え方や見方を啓蒙することが少なからずできたと言える。

一方，障害のある人がスポーツを行うことによって得られる効果については，身体的効果，心理的効果について男子学生で有意な変化がみられず，社会の意識への影響についても男子学生では有意な変化が示されなかった。これらの結果は，スポーツそのものやスポーツの効果について，男子学生の方がより高いレベルを期待，もしくはイメージすることを示すのではないかと考える。

最後に，障害者スポーツにかかわる意識については，「将来障害者スポーツに何らかの形でかかわりたい」，「将来障害者スポーツにかかわる仕事につきたい」という項目に対する回答の平均値が高くなるか否かで検討した。その結果，両方の項目について女子学生では有意な変化が示されず，男子学生で「将来障害者スポーツにかかわる仕事につきたい」という項目で有意な変化がみられただけで，「大変そう思う」と回答する学生数は増えなかった。第１報で，障害のある人や「障害者スポーツ」に対する認識がポジティブに変化しても，その変化は現場で障害のある人のスポーツ活動にかかわりたいという指導者としての意識にすぐには影響しないことが明らかになったことから，2007年度と2008年度の授業では，「自分達にできること」や「指導者の重要性」などを強調したが，結果にはあまり反映されなかった。

４．「障害者スポーツ」の指導について

障害のある人を指導することになったら自信はあるかという問いに対して，「大変自信がある」，「やや自信がある」，「少し自信がない」，「まったく自信がない」という４段階尺度で回答を求め，履修前後で変化をみたところ，表４のような結果となった。

表４　障害のある人を指導することになったら自信はあるか

	男子学生(n=56)		女子学生(n=60)	
	履修前	履修後	履修前	履修後
大変自信がある	0	1	0	0
やや自信がある	3	17	1	12
少し自信がない	18	19	19	36
まったく自信がない	35	13	39	8
回答なし	0	6	1	4

指導に対して「まったく自信がない」と回答していた学生が，履修前の74名から履修後は21名に減り，「やや自信がある」と回答した学生数が履修前の４名から履修後は29名に増加した。男子学生では，履修前に「まったく自信がない」と回答していた35名のうち，14名が「少し自信がない」，７名が「やや自信がある」，１名が「大変自信がある」へ変化した。女子学生では，履修前に「まったく自信がない」と回答していた39名のうち，23名が「少し自信がない」，６名が「やや自信がある」へ変化した。これらの結果から，授業を履修することで，障害のある人とかかわることに対する不安や戸惑いを少し軽減させることができたのではないかと考える。前述のとおり，積極的にかかわるという面では有意な変化がみられなかったが，高齢社会が加速し，障害のある人も増加傾向にある社会において，今後障害のある人とかかわる機会が増えることが予測される。そのような中で，障害のある人に対してスポーツの指導ができるという自信を持っていることは，少なからず障害のある人とかかわるための知識と技術を持っていることにつながり，スポーツだけでなく日常生活で障害のある人とかかわる際にも役立てることができるだろう。

Ⅴ　まとめ

本稿では，体育学部生の障害のある人と「障害者スポーツ」に対する認識の変化の第２報として，2007年度と2008年度に開講された「障害者スポーツ演習」を履修した学生の結果を報告した。まとめとして，１）「障害者スポーツ」をみたことがある学生は多いものの，実際にかかわったことがある学生は少ない，２）視覚障害のある人への対

応の意識は授業の履修前後で変化する，３）障害のある人や「障害者スポーツ」に対する認識は授業の履修前後で変化するものの，男子学生よりも女子学生の方が変化が顕著である，４）授業の履修は，「障害者スポーツ」の指導について自信を持たせることができる，５）障害者スポーツの現場に携わることについては消極的な学生が多い，ということがわかった。

2006年度から2008年度の授業で，車椅子バスケットボール（写真１）などの「障害者スポーツ」を体験した履修学生からのコメントには，「障害者スポーツのイメージが変わった」，「障害があってもできるスポーツがたくさんあることがわかった」という回答が多かった。スポーツが障害理解を深めるきっかけとなる可能性は高く，指導者を送り出す体育学部において重要な観点であるだろう。

今後は，第３報として，「障害者教育論」という講義のみの授業を履修した学生の変化と，授業間の比較結果について報告し，授業内容の検討と改善に役立てていきたいと考えている。



写真１　車椅子バスケットボール体験授業の様子

引用・参考文献

１）吉岡尚美・内田匡輔（2007）障害のある人と「障害者スポーツ」に対する体育学部生の認識の変化に関する調査―「障害者スポーツ演習」の試み―，東海大学紀要体育学部，37，pp. 21-27.
２）徳田克己・水野智美編著（2005）障害理解―心のバリアフリーの理論と実践，第１部４．障害者とマスコミ，誠信書房，pp. 23-29.
３）徳田克己（1996）障害者スポーツに関する大学生の認識―視覚障害者を中心として―，障害理解研究，１，pp. 61-65.